

「うつ病は薬で治療すべきか？」

河 智世(Chise Ha)

無所属

序論

うつ病は、今日多くの人々が抱える深刻な精神的疾患であり、その治療法として薬物療法が一般的に用いられている。本研究では、うつ病の定義や薬による治療の適切性について検討し、最終的には人間の感情やその本質に関する哲学的な問いを考察する。

世界保健機関 (WHO) の報告によれば、うつ病は成人において最も一般的な精神障害の一つであり、全世界で約 3 億人が影響を受けている。うつ病は、持続的な悲しみや興味喪失、エネルギーの低下を特徴とし、患者の社会的、職業的機能を著しく低下させる。この対処法として今日では薬物療法が広く行われているが、果たしてこの治療法は適切なのだろうか。

西洋医学の目的

まず薬とは何かを理解するために、西洋医学の基本的な前提に着目する。西洋医学では、薬は体内の不調を正常に戻すために処方される。例えば鼻風邪においては、自分の体 (粘膜) がウイルスを感知し、免疫細胞が活性化することで症状を引き起こすといった一連の因果関係が証明されている。これを抽象化した場合、免疫細胞の活性化とは、人間の「生体アルゴリズム」にバグが生じている状態であると言い換えることができる (この「生体アルゴリズム」という概念は、ユヴァル・ノア・ハラリの『ホモ・デウス』に由来している)。よって西洋医学の目的とは、病気によって引き起こされる生体アルゴリズムのバグを解明し、薬や手術において解消することであると解釈できる。仮にうつ病を薬で治療することが適切であるとした場合、うつ病とは鼻風邪同様、単に人間の生体アルゴリズムにバグが生じている状態であると認めたことになる。実際にうつ病患者においては、脳内の神経伝達物質、例えばセロトニンの減少が確認されており、これはうつ病が引き起こす生体アルゴリズムのバグであると解釈できるため、うつ病における薬物療法は合理的であると結論づけられそうだ。しかし、ここで一つの疑問を呈さずにはいられない。果たして、うつ病の原因は単なる生理的なものなのだろうか？

うつ病は感情の病気か、生体アルゴリズムのバグか

まず注目したいのは、うつ病が「心の病気」とされ、決して「脳の病気」とは呼ばれない点である。仮にうつ病の原因をセロトニンの減少、つまり脳における生理状態の異常であると認めた場合、心の病気は単なる生体アルゴリズムのバグであると解釈されることになる。『ホモ・デウス』の著者ユヴァル・ノア・ハラリは、現代科学が人間の感情や思考をデータ処理の結果として解釈する傾向が強まっていると指摘している。このため、愛や悲しみといった感情も、脳内の化学反応に過ぎず、そこには自由意志が介在しないことになる。しかし、ハラリはこの見解に対して警鐘を鳴らし、人間の感情や自

由意志を単なるデータとして扱うことに疑問を呈している。したがって、うつ病を単なる生体アルゴリズムのバグとして捉えることは、感情そのものが生理的反応に過ぎないという論理につながりかねない。また、感情を生理的反応と見なすことは、人間という生命は生体アルゴリズムに過ぎないという論理に発展する恐れもある。

感情とはなにか

では、感情とは一体何なのだろうか。脳内の化学反応と人間の感情の関係については、現時点で科学的に明確に証明されているわけではない。確かに、たとえば恋愛において脳内の神経が活性化し、それが心臓の拍動を早めるといった生体アルゴリズム的な因果関係は示されている。しかし、なぜそれが「この人が愛おしい」「出会えて嬉しい」「嫌われたら悲しい」といった感情に結びつくのかについては、依然として証明されていない。一方で、科学や技術の発展がこれまで多くの疑問を解消してきたことは否定できない。そのため、感情と生体反応の関係についても、今後数年のうちに明確な因果関係が確立される可能性が高い。しかし、あえてここで、もう一つ重要な疑問を提起したい。果たして、感情を科学的に証明することは本当に必要なのだろうか。

トマス・クーンの『科学革命の構造』では、科学の進展が単なるデータの蓄積によって行われるわけではないことが示されている。クーンは、科学は「パラダイム」と呼ばれる枠組みに基づいて進行し、その枠組みが変わることで新たな理解が生まれると述べている。うつ病の理解においても、現状は従来 of 生物学的視点が主流となっているが、クーンの理論を考慮すると、病気をどのように定義し理解するかは社会的視点や文化的背景によって大きく影響されると言える。このような観点から、うつ病に対する治療法も見直される余地が大いにあると考えられる。さらに、うつ病の定義や治療法について再定義することは、いまだ科学的に証明されていない感情について、科学的方法以外の解明や、解明すら必要としないという新たなパラダイムへとつながる可能性がある。

結論

私たちは、うつ病に対する薬物療法が最も正当な治療法であるかを問い直すことで、まず「心の病気」の定義を見直すことができた。さらには、人間とは生体アルゴリズムに過ぎないのか、感情はアルゴリズムのデータ処理の結果に過ぎないのかという議論を展開することができた。本研究では、うつ病を単なる脳の不具合、すなわち生体アルゴリズムのバグとして捉えることは不十分であり、私たちが生きる社会の中で形成される多様な感情の結果として捉える必要があることを示した。また、その治療法において具体的な代替案を見つけるには至らなかったが、薬物療法という従来確立されてきた科学的アプローチの有用性を認める一方で、これまで軽視されがちだった私たちの感覚や感情に基づいた方法も考慮されるべきであると結論づけられる。